

中原 中也

汚れっちまった悲しみに……

汚れっちまった悲しみに 今日も小雪の降りかかる
汚れっちまった悲しみに 今日も風さえ吹きすぎる
汚れっちまった悲しみは たとえば狐の革裘(かわごろも)
汚れっちまった悲しみは 小雪のかかってちぢこまる
汚れっちまった悲しみは なにのぞむなくねがうなく
汚れっちまった悲しみは 倦怠(けだい)のうちに死を夢(ゆめ)む
汚れっちまった悲しみに いたいたしくも怖気(おじけ)づき
汚れっちまった悲しみに なすところもなく日は暮れる……

朝の歌

天井に 朱(あか)きいろいで 戸の隙(すき)を 洩(も)れ入(い)る光、
鄙(ひな)びたる 軍楽(ぐんがく)の憶(おも)い 手にてなす なにごともなし。
小鳥らの うたはきこえず 空は今日 はなだ色らし、 倦(う)んじてし 人のこころを
諫(いさ)めする なにものもなし。
樹脂の香(か)に 朝は悩まし うしないし さまざまのゆめ、森竝(もりなみ)は
風に鳴るかな ひろごりて たいらかの空、土手づたい きえてゆくかな
うつくしき さまざまの夢。

北の海

海にいるのは、あれは人魚ではないのです。
海にいるのは、あれは、浪(なみ)ばかり。
曇(くも)った北海の空の下、浪はところどころ歯をむいて、空を呪っているのです。
いつはてるとも知れない呪。
海にいるのは、あれは人魚ではないのです。
海にいるのは、あれは、浪ばかり。

ポロリ、ポロリと死んでゆく

俺の全身(ごたい)よ、雨に濡れ、
富士の裾野(すその)に倒れたれ

読人不詳

ポロリ、ポロリと死んでゆく。

みんな別れてしまうのだ。

呼んだって、帰らない。

なにしろ、此(こ)の世とあの世とだから叶(かな)わない。

今夜(いま)にして、僕はやっとこ覚(さと)るのだ、

白々しい自分であったと。

そしてもう、むやみやたらにやりきれぬ、

(あの世からでも、僕から奪えるものでもあったら奪ってくれ。

それにしてもが過ぐる日は、なんと浮わついていたことだ。

あますなきみじめな気持である時も

随分(ずいぶん)いい気でいたもんだ。

(おまえの訃報(ふほう)に遇(あ)うまでを、浮かれていたとはどうもはや。

風が吹く、

あの世も風は吹いてるか？

熱にほてったその頬(ほお)に、風をうけ、

正直無比な目で以(もつ)て

おまえは私に話したがっているのかも知れない……

—その夜、私は目を覚ます。

障子(しょうじ)は破れ、風は吹き、

まるでこれでは戸外(そと)に寝ているも同様だ。

それでも俺はかまわない。

それでも俺はかまわない。

どうなったってかまわない。

なんで文句を云(い)うものか……

骨

ホラホラ、これが僕の骨だ、生きていた時の苦勞にみちた
あのけがらわしい肉を破って、しらじらと雨に洗われ、ヌックと出た、骨の尖(さき)。

それは光沢もない、ただいたずらにしらじらと、雨を吸収する、風に吹かれる、
幾分(いくぶん)空を反映する。

生きていた時に、これが食堂の雑踏(ざつとう)の中に、坐(すわ)っていたこともある、
みつばのおしたしを食ったこともある、と思えばなんとも可笑(おか)しい。

ホラホラ、これが僕の骨——
見ているのは僕？ 可笑(おか)しなことだ。

靈魂はあとに残って、また骨の処(ところ)にやって来て、見ているのかしら？
故郷(ふるさと)の小川のへりに、半(なか)ばは枯れた草に立って、見ているのは、——僕？
恰度(ちょうど)立札ほどの高さに、骨はしらじらととんがっている。

生い立ちの歌

I

幼年時

私の上に降る雪は 真綿(まわた)のようでありました

少年時

私の上に降る雪は 霰(みぞれ)のようでありました

十七～十九

私の上に降る雪は 霰(あられ)のように散りました

二十～二十二

私の上に降る雪は 雹(ひょう)であるかと思われた

二十三

私の上に降る雪は ひどい吹雪(ふぶき)とみえました

二十四

私の上に降る雪は いとしめやかになりました……

II

私の上に降る雪は 花びらのように降ってきます

薪(たきぎ)の燃える音もして 凍(こお)るみ空の黝(くろ)む頃

私の上に降る雪は いとなよびかになつかしく

手を差伸(さしの)べて降りました

私の上に降る雪は 熱い額(ひたい)に落ちもくる

涙のようでありました

私の上に降る雪に いとねんごろに感謝して、神様に

長生(ながいき)したいと祈りました

私の上に降る雪は いと貞潔(ていけつ)でありました